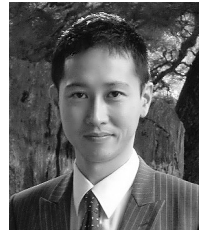


《巻頭言》

バシー海峡に散華した英霊を偲ぶ



理事・拓殖大学海外事情研究所准教授 丹羽文生

台湾とフィリピンの間に横たわるバシー海峡は、大東亜戦争末期、アメリカの潜水艦による魚雷攻撃によって、南方を目指して進む多くの日本の輸送船が沈没した場所で、「魔の海峡」、或いは「輸送船の墓場」と呼ばれていた。正確な数は未だ不明だが、千尋の深海に沈んだ犠牲者は少なくとも10万人、最大で26万人とも言われている。

当時、毎日のように浜辺に遺体が打ち上げられたらしい。その数は2,000体にも及ぶという。これらの遺体は台湾の人々によって仮安置、仮土葬された後、茶毘に臥された。一体、この事実を、どれだけの日本人が知っているだろうか。

昨秋、台湾屏東県恒春鎮猫鼻頭にある潮音寺という寺院にて、バシー海峡で戦死した日本人を追悼する「バシー海峡戦没者慰霊祭」が行われ、筆者も参列した。潮音寺は1981年8月に中嶋秀次という1人の日本人男性が自らの私財と遺族から集めた浄財で建立したものである。

中嶋は1944年8月、乗船していたフィリピンのマニラに向かう輸送船「玉津丸」が潜水艦に撃沈され、12日間に及ぶ地獄の漂流の末、奇跡的に生還を果たしたという人物である。バシー海峡を見下ろす丘に建てられた潮音寺は、祖国への帰還叶わず、無念にもバシー海峡に散華した戦友への鎮魂の思いが込められている。中嶋は2013年10月

に92歳でこの世を去ったが、今でも潮音寺は管理委員会を始め、中嶋の遺志を引き継いだ地元の人々によって大切に守られている。

慰霊祭は、台湾在住の日本人のボランティアによる実行委員会が主催して行われた。戦後70年に当たる2015年8月から始まり今回で3回目となる。

当日は日本人を含む70名近い人々が潮音寺に集った。佐賀県小城市の臨済宗南禅寺派禅林寺住職で、遺族でもある吉田宗利が読経を上げる中、参列者は祭壇に焼香し手を合わせた。続いて猫鼻頭公園に移動し、高台からバシー海峡を望んだ後、後壁湖漁港沿いの浜辺に行き、エメラルドグリーンの大海原に向って白菊を献花した。

参列者に配布されたパンフレットの表紙に「銘心鏤骨」と書かれてあった。実行委員会のスローガンだそうだが、恥ずかしながら初めて耳にした四字熟語だった。「めいしんるいこつ」と読む。「銘心」は「心に刻み込むこと」、「鏤骨」は「骨に刻み込むこと」、即ち今日の日本の平和と安寧の礎となった人々の存在を決して忘れることなく心体に刻み込むという意味である。

慰霊祭では「人間は2度死ぬ」という言葉も紹介された。1度目は肉体が減じた時、2度目は人々の記憶から存在していたことすら消えてしまった時である。バシー海峡に眠る英霊たちに2度目の死を味わわせてはならない。